みのEDO
MINO
東京⇄笠原情報誌　MAIL版

発行：多治見市美濃焼タイル振興協議会
TEL 0572-43-2141
発信：多治見市・笠原町東京情報局
tilesea.ms@gmail.com

＊協議会のウェブサイトでも公開しています。

NO 231
2023.3.27

特集

建築・建材展 セラミックタイル美濃 2023

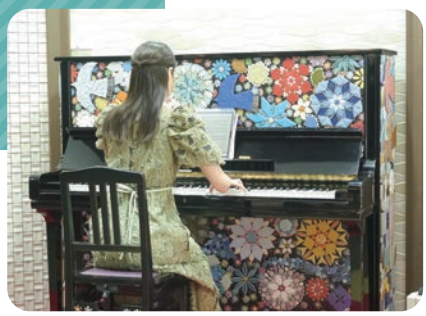
タイル100年の時間に思いを馳せる そして 未来へつなぐ

現在・過去・未来

2月28日（火）～3月3日（金）の4日間、第29回「建築・建材展 2023」が東京ビッグサイト（東京都江東区）にて開催された（主催：日本経済新聞社）。同展は、住宅・ビル、各種施設向けの最新建材や設備機器をはじめ、設計や工法、ソフトウェア、関連サービスに関する建築総合展。
多治見市美濃焼タイル振興協議会が主催する「セラミックタイル美濃2023」の展示内容を紹介する。

「セラミックタイル美濃2023」

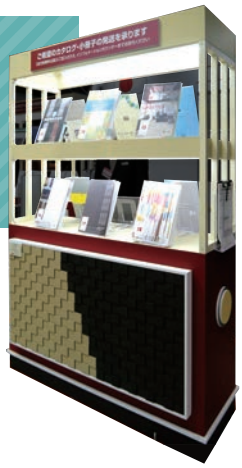
テーマブースは、2022年4月12日に迎えた「タイル名称統一100周年」にちなみ、100年前の大正時代の駅舎をイメージした。昨年4月に初披露して以降、各地を巡回したタイルピアノも登場。会場に美しい音色を響かせた。
今年は16社が出展し、新製品や試作品を披露した。各社ブースの様子を次ページより紹介する。



タイルピアノは、来場者も自由に演奏できるようにした。音色に誘われてブースを訪れる人も。

初日に多治見市美濃焼タイル振興協議会の糠野嘉則会長（右）、多治見市の古川雅典市長（左）が挨拶。

高く掲げられた時計にもタイルがあしらわれる。



床には線路を描き、電車を模した棚を配置。各社のカタログを置いた。

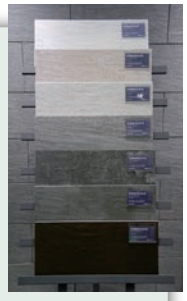
多治見市内のタイル業界と多治見市陶磁器意匠研究所が共同で3Dモデリング技術の活用方法を研究。3Dプリンターで製作した樹脂型による、タイルの試作などを行う。

各社ブースでは「缶マグネット」を配布。4つ集めた人には有名老舗窯元が作陶した「美濃焼湯呑み」を贈呈した。

「セラミックタイル美濃」16社のブースを紹介

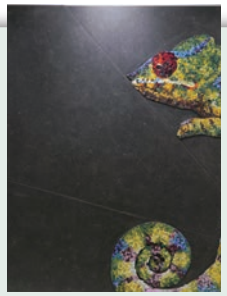
(株)アイコットリョーワ

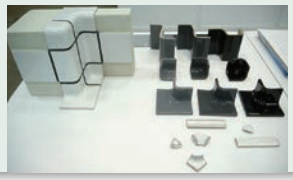
テーマは、「タイルのトータルコーディネート」。住宅の外構を模したブースで、外壁、玄関ポーチ床、アプローチ、駐車場まで同じテイストのタイルを施し、統一感を出した空間を提案。「グラン舗石シリーズ」は、エクステリアほか、駐車場にも施工可能な18ミリ厚の大判タイル。



(株)エクシィズ

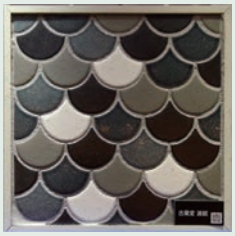
商社兼メーカーとしてモザイクアートや特注タイルなど、様々に展開。「3D Trims Round & Square」は、トリム(角や端部などをおさめる部材)を用いて高級感のあるタイル空間を作り出すシリーズ。現在は白色のみで、マットとブライトの2タイプ。特注色にも対応。トリムは各6形状を揃える。





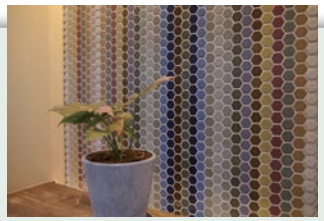
(株)カネキ製陶所

古窯変シリーズは販売して10年以上になる人気商品。波紋やボーダーなど、形やサイズが異なる6種類を揃え、色は種類ごとの設定で、全体で20色以上になる。新製品「ルナース」は、土や石のような面状で焼き物らしさを感じさせる外装用タイル。



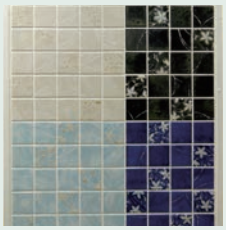
(株)オザワモザイクワークス

Roche(ロシェ)は、22ミリ、19ミリの丸形と六角形のタイルを用いてパターンをオーダーできるブランド。「自然の色彩」「風合い」にこだわり、マットな質感で、スモーキーな16色を揃える。「木立の中のこもれび」など、パターンのネーミングにも世界観が表れる。



三協製陶(株)

新製品「CASSER」はフランス語で「粉砕する」という意味があり、ロングセラーの150ミリ角のデザインタイルを58ミリ角のサイズにしたもの。鮮やかな色合いの8色を揃える。「マイジャスミン」は、ジャスミンの花がデザインされた柔らかな印象をもち、7色を揃える。

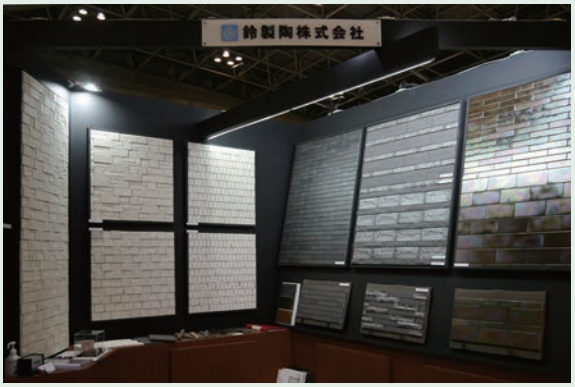


杉浦製陶(株)

営業担当者がデザインした18種類の試作品を展示。来場者に評価をしてもらうアンケートを実施した。昨年の建材展で好評を得て商品化された新製品を披露。「OHM」は、細かい縦筋と表面のゆらぎが特徴。6色を揃える。「ZELDA」は、星型がレリーフされたタイルで、張り方によって異なる模様が楽しめる。

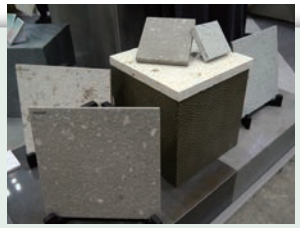
鈴製陶(株)

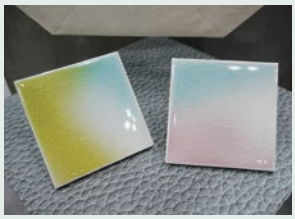
昨年の建材展で試作品として展示した「稀彩シリーズ」を商品化。虹色やメタリック調の光沢感があり、照明の色や角度によって様々な表情を見せる。今年は異なるサイズを試作。無釉タイルと組み合わせて使用する提案も。新製品「乱片シリーズ」は、石のような面状をもつ。



SWANTILE／(株)TChic

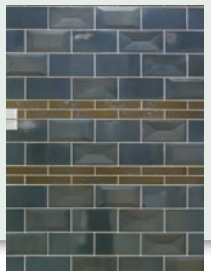
ブースは店舗をイメージ。外国人客向けホテルでの使用を意識し和柄のモザイクタイルや、大判タイルを展示。試作品「日本の天然石シリーズ」は、札幌軟石、十和田石、琉球石灰岩を模したタイル。「Craze mix square」は、釉薬を8度がけして厚みを出し、貫入を入れた手作りのタイル。





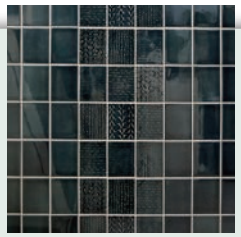
（株）セラメッセ

新製品「アーバンシェイプ」は、白と黒のモノトーンでモダンな印象。白は丸をモチーフとし、黒はボーダー。それぞれ３つの面状があり、組み合わせることができる。「アーバンクロム」はメタリックな色合いの5色を揃える。凸タイプや凹タイプなど、面状は4つあり、光の当たり方により様々な表情を見せる。



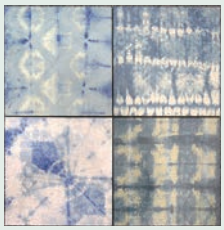
（株）TNコーポレーション

「作り手の顔がわかるように」との思いの下、新製品のタイルとともに、その開発者やコラボレーションした陶芸作家を紹介。「陰翳（いんえい）」は陶芸の技法を用いて手仕事で仕上げたタイル。「断片」はパスタやそろばんなど様々な日用品を使って模様を施したタイル。廃棄される釉薬を集めて再利用するプロジェクトも紹介。



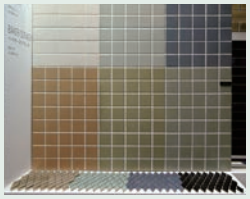
長江陶業（株）

商社として地元多治見から海外まで複数のメーカーのタイルを扱う一方、自社で企画したオリジナル商品を展開。「Sibori」は、実際にさらしを染めて作り出した模様をスキャンして施したタイル。従来のタイル見本パネルに加え、今回は新たに小さなサイズの見本パネルを300枚ほど制作して展示した。



名古屋モザイク工業（株）

コンセプトは「温故知新」。従来の製法でつくられたタイルとともに、最先端技術が用いられたタイルを展示。インクジェットプリントにより石の質感や、釉薬のむらを表現したタイルや、キッチンのテーブルトップとしても使用できる抗菌・抗ウイルスの機能をもつタイルも。大型タイルを金具で支持し、完全乾式で施工する「AMクランプ工法」を紹介。



ニッタイ工業(株)岐阜工場

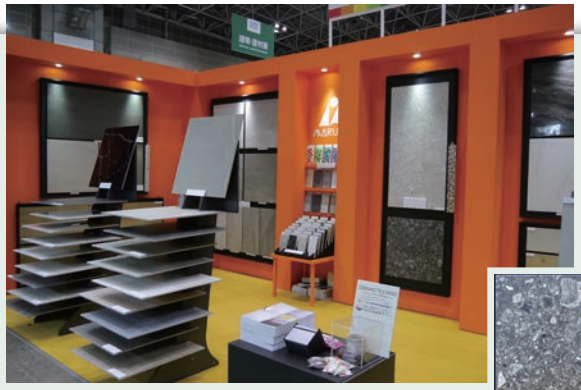
主に湿式タイルを製作するメーカー。製造方法を映像で紹介。パネルに並べられた様々な二丁掛けタイルは釉薬を使わず、土の調合や焼成方法によって色あいを変えたもの。「ミルト」は釉薬を用いたタイルで、落ち着いた色調の6色を揃える。

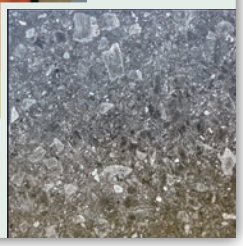
藤垣窯業(株)

ガルバリウム外壁の住宅やリビングに手軽にタイル外装を施すことのできるパネル材「MExT(メクスト)」を展示。板金職人による施工が可能で、タイルの変更も容易にできる。タイルは600×300ミリのサイズで、美濃焼タイル58種のほか、輸入タイル71種を揃える。

(株)丸喜

商業施設から住宅まで幅広く使用できる大型セラミックタイルを展示する。最大サイズは1200×600ミリ。「グランヴィア」は古代ギリシャの砂礫の床をイメージ。大型タイルの間に、モザイクタイルを組み合わせて張り、アクセントにするという新たな提案も。





(有)丸万商会

オリジナルのマジョリカタイルは、透明感のある釉薬を手で塗り分ける。色のパターンは8色を揃える。試作品の「ビーコン」は、曲線ラインの光沢が印象的。手描きタイル「ホームメイドシリーズ」のピアスは七窯社とコラボレーションして制作。

多治見市モザイクタイルミュージアム
タイル名称統一100周年記念

タイルの まちをあるいてみた Studio record 展

開催中〜5月7日（日）まで

名称統一100周年記念巡回展に続く今回の企画展は、昨年の「国際陶磁器フェスティバル美濃」で銀賞を受賞した「スタジオ レコード」が参画。様々な作品や展示からタイルの新たな可能性を提示する。

タイルハウス ミノとレコード ＊1
内部の様子。奥の作業台に置かれたガラス容器には砕かれたタイルが入っている。

最初に来場者を出迎えるのは、四角い形の小さな建物。外壁には、モザイクタイルの製造工程で使われる張り板、裏ネットや紙が施され、セルフビルドのような自由さ、楽しさが伺える。この「タイルハウス ミノとレコード」は、スタジオレコードの「制作小屋」をイメージした作品。建物内部には作業台や道具類が置かれ、この企画展の制作現場のように思われて期待がふくらむ。

スタジオレコードは、岐阜市と名古屋市を拠点とする工房で、陶芸家・造形作家である宮部友宏氏を中心に陶芸や木工という複数のジャンルの作家が参画。タイルや什器の制作、イベントの企画運営まで幅広い活動を行い、昨年の「国際陶磁器フェスティバル美濃」ではタイルの作品を出展。銀賞を受賞した。

今回の企画展は学芸員の村山閑さんが声をかけて実現。多治見市笠原町界隈のタイルの生産現場を巡り、感じたことや考えたことを表現するという趣旨のもと、制作されたのが冒頭の「制作小屋」であり、数々の作品たちだ。

タンク ファクトリー ビルディング ＊2
作品にはときおり手が加えられ、変化・進化する。取材時には新たに照明が設置されていた。

「タンク ファクトリー ビルディング」はタイルの原料製造工場をモチーフとした作品。巨大なタンクを戴く建物の上段には陶製の小さな椅子やテーブルを置く。タンクの真下から中央部分が吹き抜けとなり、一階には砕かれたタイルが集積。これがタイルの原料であり、最後に砕かれて粉となった姿でもある。家具は働く人を表し、工場でありながら温かみを感じさせる。

受賞作品「槿木町 長屋のタイル」は、今回新たに制作した「土壁再利用のタイル　試作A 試作B」とともに展示。タイルは古民家を改装する際に撤去した、土壁の土を再利用して制作されていて、素朴な質感と水彩画のような色の濃淡が印象的だ。

ほか、「土と木のタイル」「リサイクルタイルのタイル」「雫タイル」「黒板タイルハウス」といった多彩な作品が登場。そこには環境への配慮や「循環」の視点、また生活を楽しく豊かにするという観点で、様々な試みがなされている。作品に添えられた作者のコメントに共感しつつ、タイルの新たな可能性に気づかされて嬉しくなる。

開期中はスタジオレコードのメンバーが講師となりワークショップを開催。その理念を体感できる機会となりそうだ（詳細はミュージアムのウェブサイトにて）。

橦木町 長屋のタイル ＊3
建築家の藤森照信氏が「私が強く魅せられたのはタイルの表情で、これほど爽やかでかつ味わい深いタイルは滅多にない」と絶賛。タイルの出っ張りの部分にフックをつけることができる。

黒板タイルハウス ＊4
チョークで文字や絵がかける黒板タイル。利便性を高めるためでなく、生活を楽しくする機能を持たせることを提案する。平日に限り体験することができ、来場者による絵で埋め尽くされていた。

土と木のタイル ＊5
家具などの制作過程で発生した端材とタイルを組み合わせた作品。タイルは木の節目や傷を写し取った型を用いて制作した。

太白焼試作　雫タイル ＊6
雨粒が伝って落ちるときに、雫形になるように工夫したタイル。太白焼は19世紀頃に瀬戸・美濃地方でつくられた染付けを施した陶器。その研究開発を行う岐阜県セラミックス研究所に、宮部氏がタイルの制作を提案して実現した。

＊1　制作：スタジオレコード／ハウスデザイン：宮部友宏／2023年

＊2　制作：スタジオレコード／ハウスデザイン：宮部友宏／2023年（ミニチュア陶器　デザイン：種田季林、宮部友宏）

＊3　スタジオレコード／宮部友宏／2020年

＊4　制作：スタジオレコード／ハウスデザイン：宮部友宏、髙山愛／タイルデザイン：髙山愛

＊5　制作：スタジオレコード／デザイン：宮部友宏／2023年／ツキ板提供：イビケン株式会社

＊6　制作：岐阜県セラミックス研究所／デザイン：小稲彩人／素案：宮部友宏／2023年／岐阜県セラミックス研究所蔵

※2、3、4、5はスタジオレコード蔵

タイル名称統一100周年記念巡回展が東京へ！

日本のタイル100年 美と用のあゆみ

江戸東京たてもの園　3月11日（土）～8月20日（日）まで

2022年4月よりINAXライブミュージアム、多治見市モザイクタイルミュージアムを巡回した3館共同企画展が「江戸東京たてもの園」でスタートした。同園は東京都江戸東京博物館の分館として開設。文化的価値の高い歴史的建造物を移築し、復元・保存・展示している。企画展では、3館共通の内容に加え、園内の建造物とタイルを紹介。園内のタイル巡りができるマップも用意されている。また今年、関東大震災から100年を迎えることから、「震災とタイル」の展示が追加された。開期中は、様々なイベントも予定している（詳細は園のウェブサイトにて）。

江戸東京たてもの園
東京都小金井市桜町3-7-1（都立小金井公園内）
休園日：月曜

子宝湯浴室のタイル
1929年（昭和4）江戸東京たてもの園内